

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 21 日現在

機関番号：11302

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20K02814

研究課題名(和文)「期待の三層構造」と価値再構成による学力向上好循環モデル

研究課題名(英文) a virtuous circle model for improving academic ability through three-layered structure of expectations and value reconstruction

研究代表者

丸山 千佳子 (Maruyama, Chikako)

宮城教育大学・大学院教育学研究科高度教職実践専攻・特任教授

研究者番号：90866857

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、(1)学力向上は、「期待の三層構造」に基づくアクター間の関係性のベストミックス(最適化)によりもたらされている、(2)期待の具体的な行為として、アクターの行動や資質能力の向上に対する価値づけ(価値の再構成)が行われ、アクターの自己有用感を高め、次の段階での成功を導いている、という仮説をたて、学力向上好循環モデルの実証を試みた。A県B自治体のC教育長の下での自治体内の学校経営を分析対象とした。教育長を起点とするサーバント・リーダーシップとしての「期待」が、パフォーマンスの最大化としての学力向上を導き、とりわけ、校長には人材育成能力向上によるアイデンティティの形成をもたらした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

リソースが決して豊かではない自治体であっても、優れた学校の成果が成立しえた状況を解析した。公教育ならびにそれらを支える公立学校教員による仕事の成果について、サーバント・リーダーシップによる教師たちのつながりや、自己有用感を土台とする内発的動機づけから明示した。

研究成果の概要(英文)：In this research, (1) the improvement of academic ability is brought about by the best mix (optimization) of the relationships between actors based on the "three-layered structure of expectations", and (2) the concrete actions of expectations are: It is hypothesized that the actor's actions and the improvement of their qualities and abilities are valued (reconfigured values), and that the actor's sense of self-efficacy is enhanced, leading to success in the next stage. We tried to validate the model. The target of the analysis was the school management within the local government under the superintendent C of the municipality B in prefecture A. The "expectations" of servant leadership starting from the superintendent led to the improvement of academic ability as performance maximization. Above all, it brought about the formation of identity for the principal by improving human resource development ability.

研究分野：学校経営

キーワード：サーバント・リーダーシップ 期待 価値理論 自己有用感 内発的動機づけ 組織マネジメント 学力向上

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

学力の向上は、教育論としても政策論としても重要な課題である。学力の向上は可変的で指導と環境に密接に関わっており、それらの生成や構成が、テスト得点の一覧化に相当するレベルにまでモデル化され、充実のための予算配分に社会的な支持が得られるようにしていくことが望まれる。本研究では、不利な状況にある子どもたちが多数存在するにもかかわらず、学力向上を実現したA自治体を手がかりに、(1) 学力向上は、「期待の三層構造」に基づくアクター間の関係性のベストミックス（最適化）によりもたらされている、(2) 期待の具体的な行為として、アクターの行動や資質能力の向上に対する価値づけ（価値の再構成）が行われ、アクターの自己有用感を高め、次の段階での成功を導いている、という仮説をたて、学力向上好循環モデルとして実証を試みる。三層とは、地域社会から学校（校長）、校長から教員、教員から子ども、である。導出するモデルを好循環と捉えるのは、他者からの期待→自己有用感の高まり→行動・学力・資質能力の向上が、児童生徒だけでなく、アクター間の関係を有機化させ、次のステージ（児童は中学校、教員・行政職員は他校での管理職など）で求められる資質向上につながっていると考えるからである。

2. 研究の目的

本研究は、地域・学校における「期待の三層構造」とそれによる価値づけ（価値の再構成）から、学力向上好循環モデルを示し、実証することを目的とする。

3. 研究の方法

- ① A自治体 B小学校の過去5年間の学力テストの伸びについて、集団と個人について特定する。
- ② 「期待の三層構造」としての地域・行政・管理職・教員の期待がどのように自己有用感を導いているのか、アクターの関係性と価値再構成の過程について記述する。(A自治体広報誌、B小学校・接続するC中学校の学校・学年・学級通信のテキストマイニング、行政、管理職、教員、卒業生のヒアリングなどを行う)
- ③ 「期待の三層構造」に関わったアクターが、他者からの期待により高い自己有用感をもち、次の段階でどのように資質向上を達成しているか記述する。
- ④ 変数化した「期待の三層構造」と価値再構成についてモデル化し、教職大学院の現職院生等と協議を行い、モデルの有用性を検討する。

4. 研究成果

(1) 学力好循環モデル構築のための「期待—価値モデル」の精査

丸山千佳子、本図愛実、小澤晃（2022）「期待—価値モデルによる『効果的な学校』」『宮城教育大学紀要』56, 335-347 として論文化（方法①②）

要旨：

教師が主体的に学び、成長していくような学校経営であるためにはどうすればよいのか。そのような学校経営はどのような過程であるのだろうか。その手がかりとなる、学校経営の規範を示す「効果的な学校」論は、①基本的な仕組み、②それが機能していくための環境、③それらを動かしていく人間の心理、から構成され、「強いリーダーシップ」「指導力向上のためのリーダーシップ」「期待」が重視されている。これらについて動機づけ理論の一つである、期待—価値

モデルの一角を担うエックルスモデルを融合することにより、「期待」の過程をみる事が可能となる。つまり、管理職から教職員に対して、教職員がもつ目標において、「アイデンティティ、短期目標、長期目標、現場の姿、自分の能力に対する認識」といった働きかけが行われ、組織の力を高めているという視点が得られる。

「効果的な学校」と目される学校の教職員に質問紙調査を行い、その記述について形態素解析を行ったところ校長から、そのような働きかけを受けていることが明らかとなった。また、優れた学校経営を行っている校長職の認識においては、「期待」による人材育成が日常的に行われていると言え、教職員一人ひとりに、キャリアステージに応じた丁寧な働きかけが行われており、それらが組織としての力を高めていた。これらを踏まえると、強いリーダーシップと「期待」は一体的であるとも理解できる。

期待一価値モデルの創唱者であるアトキンソンにおいて、「期待」は主観的確率であった。エックルスはそれを社会的文化的文脈に位置づけ、子どもが学習に取り組むという課題価値に影響を及ぼすものへと拡大した。本論は、さらにそれらが学校という組織と教職員にも援用可能であることに光をあてた。しかし、教師の仕事と思考は複雑であり、獲得価値、興味価値、利用価値、知覚されるコストで説明することができる子どもの学習とは異なる面もある。期待一価値モデルと「効果的な学校」論の融合と深化をさらに検討していく必要がある。

(2) 「期待」の内実としてのサーバント・リーダーシップの記述

丸山千佳子、本図愛実 (2023) 「サーバント・リーダーシップで捉える教育長像 ～期待によるアイデンティティの形成～」『宮城教育大学紀要』57, 97-109 として論文化 (方法③)

要旨：

本稿では、教育長資質能力研究と学校組織マネジメント論の架橋を図りつつ、学校の自律的で最大化されたパフォーマンスを引き出すことができる教育長の資質能力をサーバント・リーダーシップから捉える。その際、サーバント・リーダーシップとしての「期待」について、エックルスの「期待一価値モデル」を援用して記述を試みた。X自治体のA教育長、5名の校長への質問紙調査から、A教育長の「期待」には妥当性と一貫性があり、教育長が、校長たちの心理に寄り添い、心理的物的環境を整え、高い成果に導く、サーバント・リーダーシップを優れて発揮したことがわかった。A教育長の「期待」に対し、校長たちは、受け手として得たことをそれぞれの咀嚼や創意工夫とともに子どもたちや教職員への働きかけに変換していた。それは、校長としての資質能力が向上していくことが実感される、アイデンティティ形成の過程であった。資質能力向上の主なものとは人材育成についてであり、教育長の「期待」から、多様なキャリア形成を包含する、脱序列化された人材育成が導かれ、校長のアイデンティティ形成をより高めることとなっていた。

X自治体におけるA教育長と5校の校長による、連鎖するサーバント・リーダーシップは、地域社会弱体化時代における学校組織マネジメントの範型となりうる。

(3) モデルの有用性の検討と普及 (方法④)

研究代表者と研究分担者らは教職大学院で現職教育に従事している他、教職員支援機構による中央研修や地方の教育センターの組織マネジメントや危機管理(いじめ未然防止・対応を含む)に関する研修講師を種々務めており、合計するとその件数は年間30講座近くになる。そのなかで、サーバント・リーダーシップの解説をしつつ、学力向上好循環モデルを提示している。ただし、研究終了時点では、サーバント・リーダーシップの提案までとなっており、モデル有用性の実証データを収集するまでには至っていない。引き続き、サーバント・リーダーシップ適用事例を推奨・収集し、有効性の数値的な把握に努める。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 本図愛実、丸山千佳子	4. 巻 56
2. 論文標題 期待 価値モデルによる「効果的な学校」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 宮城教育大学紀要	6. 最初と最後の頁 335 - 347
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 本図愛実	4. 巻 55
2. 論文標題 構成主義から捉える教職アクレディテーション	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 宮城教育大学紀要	6. 最初と最後の頁 295 - 305
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 本図愛実
2. 発表標題 子どもの成長の可視化に向けて～チームによるデータの活用
3. 学会等名 日本教育方法学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 本図愛実
2. 発表標題 期待 価値モデルによる「効果的な学校」
3. 学会等名 日本教育経営学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 本図愛実
2. 発表標題 グローバル世界における教職ア krediteーション
3. 学会等名 日本教育行政学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 丸山千佳子, 本図愛実	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ジダイ社	5. 総ページ数 230
3. 書名 グローバル時代のホールスクールマネジメント	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	久保 順也 (kubo jyunya) (20451643)	宮城教育大学・大学院教育学研究科高度教職実践専攻・教授 (11302)	
研究分担者	本図 愛実 (honzu manami) (70293850)	宮城教育大学・大学院教育学研究科高度教職実践専攻・教授 (11302)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------